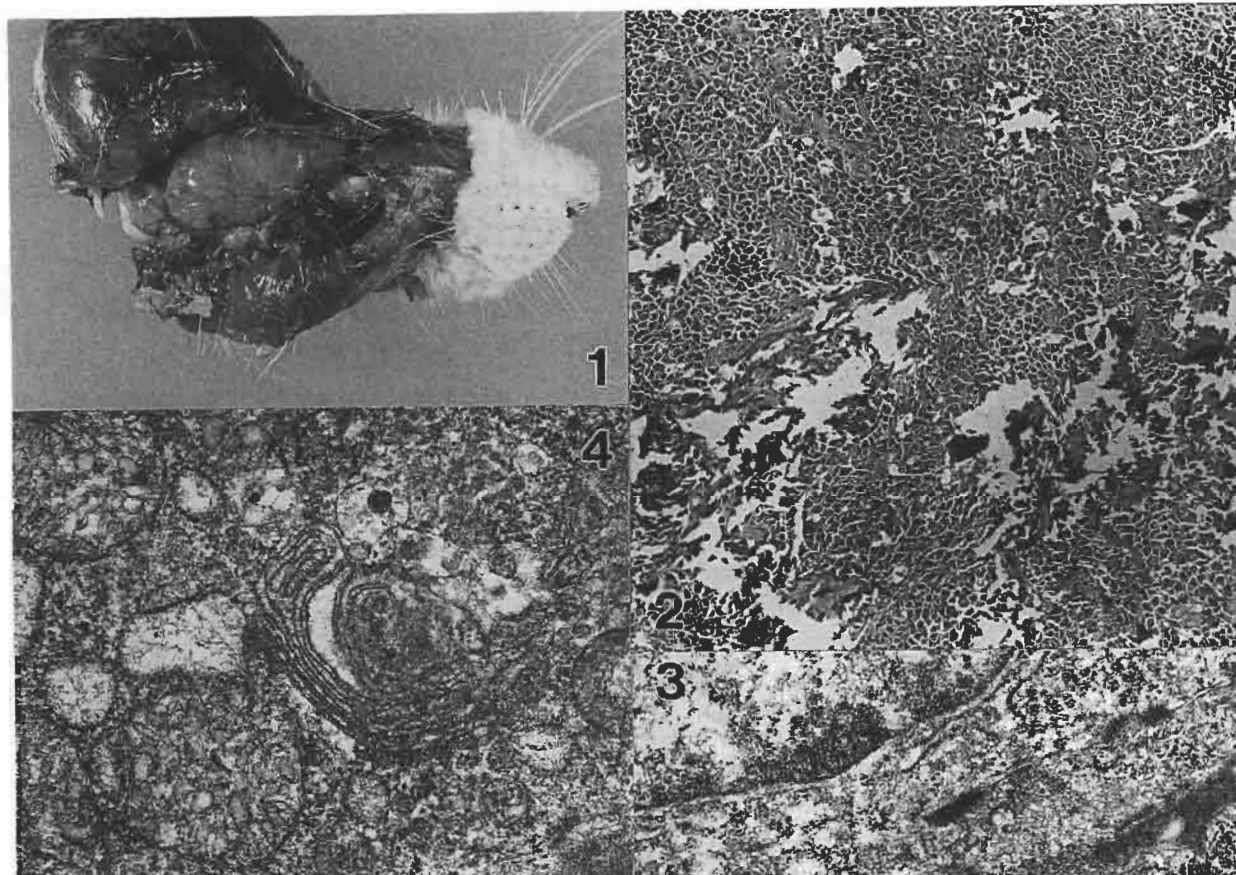


ラットの頭部腫瘍

(財)食品農医薬品安全性評価センター出題 第36回獣医病理学研修会標本No.660



動物：ラット (F344/DuCrj), 雄, 83週齢。

臨床事項：本例は長期毒性試験の投与群として用いられた。81週齢時より全身性の消瘦と頭部皮下に腫瘍が観察された。83週齢時には健康状態の悪化（自発運動低下，立毛，眼分泌および不整呼吸）の為，切迫屠殺。

剖検所見：頭頂から後頭部皮下に27×30×20mm大の淡赤色の髄様腫瘍が認められた。皮膚との連続はなく，表面を覆う頭頂骨および頭頂間骨は非薄化し，一部消失していた。本腫瘍と脳実質との連続は認められず，左大脳半球および小脳は圧迫され扁平化していた（写真1）。

組織所見：本腫瘍は充実性で，島状あるいは胞巣状構造を呈していた。間質は比較的血管が豊富で，広範な石灰沈着（写真2）や一部に間質の軟化・骨化生，一部に肉腫様の形態を示す部位も観察された。腫瘍細胞は円形～不正形で細胞質に好酸性微細顆粒を有し，核は淡明で類円形～多角形で1～数個の明

瞭な核小体を持ち，有糸分裂像も多数観察された。特殊染色の結果，腫瘍細胞はグリメリウス染色に弱陽性を示し，免疫染色ではNSE, 5-HTにそれぞれ一部陽性を示した。

電顕所見：腫瘍細胞の核の切れ込み像や複雑に嵌合する細胞突起，細胞間のデスモゾーム様構造が観察された（写真3）。また，大小様々の脂肪顆粒が腫瘍細胞内に観察された他，ゴルジ装置近隣には直径160～200nm大の分泌顆粒様有芯顆粒が少数観察された（写真4）。

考察および診断：以上の所見より，本腫瘍を悪性松果体細胞腫と診断した。ラットの松果体腫瘍は，大型の明調細胞と小型の暗調細胞の2細胞から構成されることや偽ロゼットの形成などが特徴とされている。今回の症例はこれらの特徴は乏しいが，組織学的に細胞異型も強く，頭頂骨を破り（あるいは巻き込み）頭部皮下にまで発育するなど，松果体腫瘍としては特異で，稀な腫瘍と考えられた。